

# 庭野平和財団 平成 18 年度活動助成 報告書

事業名称：早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター主催「ルワンダ・プロジェクト」

報告者：小峯茂嗣 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター客員講師

1. 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター主催「ルワンダ・プロジェクト」の目的  
ルワンダで 1994 年に起きた内戦と虐殺は、100 日間で 100 万人の犠牲者を出したと言われている。ルワンダの虐殺は、アウシュビッツ、広島・長崎の原爆投下、カンボジアでのクメール・ルージュによる虐殺とならぶ 20 世紀の大量殺害の象徴のひとつである。虐殺から 12 年を経た現在、世界のルワンダに対する関心は失われつつある。しかし虐殺による影響は、いまだに深く残っている。内戦で夫を失った女性たちはどのように家族を養えばいいのか分からない。両親を失った孤児たちは学校にも行けずに町をぶらつくしかない。難民キャンプから帰還した人たちは新しい家や仕事を見つけなければならない。幼い頃からジャングルでゲリラ戦をしてきた子どもたちは普通の子どもの暮らしというものすら知らない・・・。

ルワンダ・プロジェクトは、このような紛争後の平和構築途上にあるルワンダの人々とのかわりあいの中で、ルワンダ社会の新生に貢献していこうというものである。また内戦の傷を抱えながらも毎日を生きている人々の姿を日本社会に伝え、戦争とは、そして平和とは何かについて考えていく機会を作っていくことを目指すものである。

## 2. 事業実施経過

### (1) 写真展・上映会・講演会「リアル・ルワンダ」(2006年8月2日)

#### ・ 企画趣旨

2006年2月末に5人のメンバーが2週間の現地活動を行い、除隊兵士職業訓練所、少年兵社会復帰リハビリ施設、現地 NGO 等多くの場所を訪問し、様々なことを感じてきたことをもとに、より多くの人たちにルワンダのことを知ってもらおうという意図で企画。

#### ・ 会場

日本アムウェイ地下オーディトリウム

#### ・ 講演内容

##### 特別講演

15:00～15:30 アフリカ平和再建委員会事務局長 小峯茂嗣「今ふりかえるルワンダ」

18:15～19:15 国際ジャーナリスト 下村靖樹「ルワンダの復興 1995～2005」

19:30～20:00 エミール ルワマシラボ ルワンダ大使「日本の皆さんへメッセージ  
交流会 20:00～20:45 大使を囲んでの交流会

### (2) 第二次現地活動 (2006年9月1日～20日) ※参加メンバー17名

9/1(金)	出発 羽田～関空
9/2(土)	～ドーハ～ナイロビ～キガリ
9/3(日)	午前 大学生班、UNR の学生と打ち合わせ

	市内散策 午後 サッカー・アフリカカップ(ルワンダ対カメルーン戦)観戦
9/4(月)	午前 ギシンバにて打ち合わせ/ラジオ局 Radio Flash 訪問 午後 フィデスコファンデーション訪問 夜 JICA の職員らと One Love で交流会
9/5(火)	午前 JICA ルワンダ事務所へ表敬訪問。その後市内散策 午後 カヨンザにて打ち合わせ
9/6(水)	午前 ICTR を訪問し、図書寄贈 午後 キミサガラにて打ち合わせ KIST 学生とギソジにある虐殺記念館へ
9/7(木)	休息日
9/8(金)	午前 UNR 学生とのディスカッションのための準備 午後 KIST 学生と市内散策
9/9(土)	午前 キミサガラにてスポーツ大会
9/10(日)	午後 ギシンバにて交流会
9/11(月)	午前 ストリートチルドレン班、フィデスコにてインタビュー 午後 ブタレにて UNR 学生とディスカッション
9/12(火)	午前 UNR 学生とディスカッション 午後 学生と共に国立博物館と国立大学の見学
9/13(水)	休息日
9/14(木)	午前 ARTCF 訪問。市内の洋裁訓練所見学 午後 カヨンザにて REACH の青年たちと平和・和解放強会/One Love 義足工場の見学
9/15(金)	午前 ストリートチルドレン班、フィデスコにてインタビュー 午後 ニヤマタ・ンタラマの虐殺追悼施設見学 夜 国連職員ルッチーさん宅に招かれる
9/16(土)	午前 カヨンザにて記念式典 午後 牧師たちと昼食会、ディスカッション サッカー・エキシビジョンマッチ(日ル混合チーム対牧師チーム)
9/17(日)	午後 ギシンバにて交流会
9/18(月)	ムハジの RDRC 訪問。元少年兵にインタビュー
9/19(火)	帰国 キガリ～ナイロビ～ドーハ
9/20(水)	～関空～羽田

① キミサガラ青年の家スポーツ大会

●班で設定した目的・目標

スポーツを通じた若者の交流・相互理解のきっかけづくり

●活動経過

9/6(水) キミサガラ青年の家にて打ち合わせ

9/9(土) キミサガラ青年の家グラウンドにてスポーツ大会実施。ルワンダ人と日本人の混合チーム(約10人)を4チームつくり、日本の遊び(ムカデ競争・全員リレー)、ルワンダの遊び(タヤーリ)で対戦。

●良かった点

- ・時間通りに進行でき、大きなケガや事故もなく大会を終えられたこと
- ・周りのギャラリーも含め、みんなが楽しそうにスポーツ大会に参加していたこと
- ・チームを分けたことにより、チーム内に連帯感が生まれたこと
- ・女性の参加者が半数を超えたこと
- ・現地の参加者と打ち解けられたこと

#### ●反省点

##### <全体面>

- ・運営側の人数不足。運営と競技者を分ける必要があった。
- ・ボランティアコーディネーターの方との連携が悪かった。事前打ち合わせ不足。
- ・ルワンダ人・日本人参加者双方への大会目的の伝達不足。
- ・参加者の決定が遅かった。渡航前に決定し、大会の目的や当日の流れを伝えるべきだった。

##### <競技面>

- ・タヤーリのルール不徹底による混乱。
- ・全員リレーのコースがもっと長くても良かった。
- ・ムカデのひもの結び方が各班バラバラで公平性を欠いた。

#### ② 孤児院ギシンバ・メモリアル・センター慰問

##### ●班で設定した目的・目標

- ・センターの子供たちが、外国人と出会い、異文化に触れることで喜んでもらいたい。
- ・私たちがギシンバを実際に訪問することにより、もっとも社会の犠牲になりやすい子供達の実情と、子供のための援助施設を実際に自分の眼で見て、それらの現状を知ることにより、将来的に「自分に出来ることは何か」を考え、みつけていくこと。
- ・私たちが、帰国後、私達が自分の目で見て、自分の肌で感じてきたことを周知活動の中で、日本の人々に伝えていきたい。
- ・一緒にひとつの目標にむかってひとつのことをやることによって（今回の活動でいうと、歌にあたる）文化や環境や言語の違いなどの壁を越え、ひとつになった喜びを共有したい。また、そのことがお互いの今後の生活の上で貴重な経験や自信となることを望む。

##### ●活動経過

**9/4(月)**

ギシンバ・メモリアル・センターのたちと、交流会の日程や時間の確認などの打ち合わせ。

**9/10(日)** 交流会(一日目)

開会式で両サイドの代表者挨拶やPJメンバーの自己紹介を行う。その後、日本が踊り（ソーラン節）と歌（輪になって踊ろう）を披露。また、ギシンバの子供たちが歌2曲と踊り1曲を披露してもらった両国の発表が終わった後に、お互いの国の歌（日本：「大きな栗の木の下で」、「幸せなら手をたたこう」。ルワンダ：「ベカニヤマザケザ」）をお互いに教えあう。はじめに、それぞれの歌を全体で練習した後に、子供たちとPJメンバーを混合で3つのグループに分けてお互いの歌をグループレベルで教えあって練習する。なお、この歌はお互いに17日の交流会までに練習をして、17日の交流会で一緒に歌ってビデオに撮るとというのが最終的な目標。

そのあとに、外で子供たちに踊りを見せてもらったり、一緒に踊ったり、円になって簡単な遊びをして交流。個人レベルの交流もここで行われた。

最後に閉会式を外で行い、両サイドの挨拶や、交流会の感想を述べてもらい（日本サイド1人、子ども2人）、感謝の気持ちをこめてPJメンバーで「Amazing Grace」を歌い、2日目の交流会の内容を簡単に説明して終了。

## 9/17(日) 交流会(二日目)

まず、1日目と同様に開会式で簡単な挨拶を行ったあとに、ルワンダの子供たち数人が、キニヤルワンダ語のコメディをみせてくれた。

そのあと、1週間練習をしたそれぞれの歌を全員で何回か練習したあとに、一緒に合わせて歌って、その様子をビデオで撮影した。歌を歌い終わったあと、子供たちとバPJメンバーを混合の4グループ(折り紙、けんだま、お手玉、紙風船)にわけ、日本の遊びを子供たちに教えながら、一緒に遊ぶ。ここでも個人レベルの交流が達成できた。

その後、閉会式へと移る前に、子供たち数名が再びコメディを演じてくれた。そして閉会式で両サイドの挨拶や、交流会の感想を述べてもらい(日本人1人、子ども1人)、最後にPJメンバーの1人が作詞作曲をした、オリジナルテーマソングを子供たちにプレゼントして終了。

### ●反省点

- ・渡航前の準備不足(準備開始が遅かった)
- ・班員とその他のメンバーとの情報や活動目的の共有不足(そこから班員とその他のメンバー間でのモチベーションの違いなども生じてしまった。また全体として統制がとれなくなってしまった。)
- ・歌の練習不足(練習開始時期が遅かったため、こちらが発表する歌や、2日目の交流会で一緒に歌う歌の練習不足により満足のいく歌をうたえなかった。子供たちはすごく練習していてくれて、紙をみないで歌えている子もいたのに、こちらは暗記していない人がほとんどだった。)
- ・企画段階で、決定事項の変更などが多々あり、他のメンバーを混乱させてしまった。
- ・事前の物資の調達が十分にできていなかった。
- ・事前準備の段階で関わっている人と関わっていない人の差が激しかった(1部のメンバーに負担が集中してしまい、負担の割合がそれぞれ大きく異なった)
- ・現地でのスタッフ(ギシンバの職員や、協力隊員の田中さん)との意見交換の不足
- ・グループで交流をする際に、子供たちへの統制がうまくとれなく(PJメンバーの情報や目的の共有不足や、準備の不足や遅れが原因)、何をしてもかわからない子や、楽しめていない子がでてしまった。

### ●良かった点

- ・交流会日程が2日間とれたことにより、より深い関係を築くことができた。また、継続性の良さを実感できた。(子どもたちが2回目の訪問で顔を覚えていてくれ、すぐにかかけつけてくれた。これは単なるお客様扱いではなく友人として扱ってくれた結果だと思う。また、1日目と2日目の交流会の間にお互いが歌を練習しあう時間があり、2日目には、向こう側からコメディも見せてくれたり、1日目の交流で築き上げた関係があったからこそ、積極的に活動に参加してもらえた。)
- ・PJメンバーが名札をつけたことにより、名前を何度もよんでくれたこと。(名前を呼ぶのは大切なコミュニケーションのひとつ。覚えようとしてくれたことは心の距離が縮まることにつながると感じた。)
- ・孤児院の現状を自分の目でみることができた(大勢の面倒をみるにはどのようにしたらよいかということに対するヒントや、物資はどのようなものが必要なのか、子供たちは何を必要としているかということなどを実際の現場をみたらうで、考えるきっかけになった。)
- ・娯楽が少ないというセンターの実情の中、子供たちが本当に楽しそうにしてくれていた。
- ・交流会を通して、子供たちに日本のことを知って興味をもってもらうことができた。
- ・グループでの交流を通して、個人のレベルで交流ができたりしてよかった。(ギシンバとルワンダ・プロジェクト全体、だけじゃなくて、個人と個人でつながりができた。)
- ・「幸せなら手をたたこう」「大きな栗の木の下で」の選曲。(身体で表現できるものだったから子供たちにも分かりやすかったし、何よりも楽しんでもらえた。こちらもすごく楽しかった。)

### ③ 現地団体 REACH のカヨンザ郡青年グループとの交流

#### ●班で設定した目的・目標

REACH が平和・和解に対する取り組みを行う団体であり、また第 1 次渡航で現地側が日本の戦後復興に関心があることが分かっていたので、ルワンダ・日本両者の「平和・和解」に関する考えを交換し、深めることを目的として企画立案を行った。また第 1 次渡航に引き続いて歌や踊り、それに今回からスポーツを加え、これらを通した「相互理解」をもう 1 つの目的として置いた。この 2 つの大枠に沿って各企画が以下のように目的を設定している。

#### ○平和・和解

##### 【「平和・和解」をテーマにした話し合い】

##### ・当初企画段階の目的

- ①ルワンダ人の「和解」や「平和」に関する考えを知り、自分達が「平和」について考えるきっかけにすること。
- ②他のイベント企画により、REACH 側とお互い率直に話しあえる素地が作られているならば、それを利用して、率直に意見交換をすること。①とは異なり、話し合う中身よりも、「一緒に話し合う」という行為により、連帯感や一体感を醸成するきっかけとすること。
- ③前回の交流で、日本の戦争体験（特に原爆）や戦後復興に関心があることがわかったので、日本がどのように戦争を「乗り越えてきたのか」、日本を建て直したのか、ルワンダのために何か参考になる点があれば、伝えること。

##### ・企画準備中に追加された目的

- ④日本について一方的な知識ではなく、多面的に（戦争の被害だけでなく、加害の面も）知ってもらうこと。
- ⑤自助努力の重要性を訴え、現地の人々を cheer up すること。

##### 【牧師とのフリーディスカッション】

- ⑥「宗教」という面からジェノサイド、今のルワンダを知ること。

#### ○相互理解

##### 【青年交流プログラム（歌・踊り）】

- ⑦歌・踊りを交換し合うことで文化交流を行い、相互理解の手段とする。

##### 【サッカーエキシビジョンマッチ】

- ⑧スポーツを通じた交流

#### ●活動内容

9/5(火)

カヨンザにて打ち合わせ。最初に現地コーディネーター佐々木和之氏から REACH について説明が行われ、その後打ち合わせ。この際に後日行われる「平和・和解」をテーマにした話し合いのメンバーとも対面。

9/14(木)

REACH で洋裁訓練を受けている女性グループの活動を見学。彼女達は歌で迎え入れてくれ、作成した服などをみせてくれた。彼女達の境遇、施設の状況（人数に対して部屋が小さく、ミシンが足りないこと等）を教えてもらった。

その後「平和・和解」をテーマにした青年グループとのディスカッションにすぐ移る予定だったが、青年たちがガチャチャ裁判によって一時間近く遅刻。日本側から戦争被害・加害、戦後復興に関するプレゼンを行い、それを題材に質疑応答。「(原爆を落とした) アメリカは謝ったのか?」といった日本の被害に共感してくれた様子が伺え、また戦後復興に関しては、「ルワンダは内戦だから状況が違う」、「私達は教育を受けていないから」等の否定的意見が見受けられた。

9/16(土)

早朝から青年交流のためにカヨンザに向かい、「セレモニー」の準備を手伝う。“Youth Partnership Day”と題して行った、この青年交流は市長や教会関係者等、大勢を呼んだ大々的なものとなり、交流会というよりも「セレモニー」だった。市長の挨拶からはじまり、Partnershipの証として植樹を行い、歌と踊りを交換し、牧師の説教を聴きと内容は多岐に渡った。しかし、当初設定していたプログラム通りに進まず、現地青年が準備していた寸劇はカット。プログラムより優に1時間は超え、それから昼食になった。

牧師の方々と共に食事をし、その後フリーディスカッションを行う。虐殺当時の教会の様子など、実感のこもった話がきけた。

最後に牧師の方々とサッカーを行う。これは現地で渡航前から行われていたサッカートーナメントが決勝戦を向かえており、そのエキシビジョンマッチという位置づけで参加した。協力隊の方々や現地ドライバー等の助力も得たが、残念ながら敗北。

#### ●良かった点、発見、気づき

- ・エリート層とは違う、キニヤルワンダ語しか話せない地方住民と話が出来た。
- ・National Universityで行った発表の反省を活かしてテンポ良く発表を行え、写真や翻訳した資料等を上手く使うことで難しいと思われる内容もしっかりと伝えられた。
- ・日本の被害に対してルワンダ人が心から共感を示し、様々な反応を得られた。
- ・ルワンダの方が日本の戦争被害をリアルに感じていた。
- ・果たして戦争を経験していない私達が彼らに何を言えるのか、という問題意識。
- ・平和、和解が如何に難しいが、その上で彼らが努力している様子を知れた。
- ・ルワンダで行われるセレモニーがどういったものか知れた。
- ・踊りは単に見せ合う発表会ではなく、一緒に踊るといった交流が出来た。
- ・隊員をはじめとする色々な方々と一緒にサッカーを行うことが出来た。

#### ●反省点

- ・アクシデントに備えて時間をもう少し多めにしておくべきだった。
- ・打ち合わせは当初の予定通り少人数で行うべきだった、また目的や説明は文書で伝達済でも英語ですぐにしっかりと話せるよう用意しておくべき。挨拶を重んじる国柄であることを忘れてはいけない。
- ・目的、企画内容、形式等を前日に全員で共有しておくべきだった。意識にギャップ、もっと活かせる場所に出来たはず。
- ・歌はもう少し練習しておくべきだった。ルワンダ側は非常に歌が上手い。
- ・踊りの際、音量をもう少し大きくする工夫を予め用意しておくべきだった。
- ・牧師とのフリーディスカッションはよりパーソナルな話がしやすいよう形式に工夫を施すべきだった、せめて参加人数は厳選して話しやすい体制を作るべきだったと感じる。
- ・セレモニーで贈呈品を頂いたのにも関わらず、返礼に何も用意していなかったこと。
- ・セレモニーの際、あちらが正装だったのにも関わらず、こちらはラフな格好であったこと。これは事前にセレモニーが大々的なものになると把握出来なかったことも原因。
- ・踊り、歌の交換やスポーツは見世物的であり、その後フォローがなかったので若者同士のパートナーシップと言いながらもパーソナルな関係まで繋がっていかなかった。

#### ④ 大学生交流活動

##### ●班で設定した目的・目標

ディスカッションを通し、違う環境に生きる者同士の価値観を知り合う。

##### ●活動内容

Emile Rwamasirabo 駐日ルワンダ大使から、ルワンダ全国青年委員会 (Rwanda National Youth Council) 代表 Emmanuel MUSONI 氏と、ルワンダ国立大学 (National University of Rwanda) の学生団体 University Woman Students Association(UWSA)の Claire 氏を紹介され、現地で面会した。

9/3(日)

UWSA の Claire 氏と Edison 氏と大学生交流会についてミーティング。こちら側の企画の目的・概要を説明し、ルワンダ国立大学側の要望とプランを聞き、交流会の構想を練った。

9/4(月)

宿泊所 St.Paul にルワンダ全国青年委員会代表 Emmanuel MUSONI 氏が来訪。RNYC の活動について聞き、我々の今回の活動についても説明した。RNYC はルワンダ各地域にある青年委員会の全国委員会である。活動としては第一にインガンド(Ingando)と呼ばれる青年対象の合宿形式のワークキャンプを行っている (注: インガンドは政府の事業であり、その実施を RNYC が行っているようである)。インガンドでは国家や政府の研修や、若者が国家開発に果たす役割についての討議を行うほか、貧困層のための住宅建設も行っているとのことである。活動の第二としては、HIV/AIDS の啓発を行っている。

9/8(金)

Kigali Institute of Science and Technology(KIST)学生とキガリ市内見学。Emmanuel MUSONI 氏の紹介により KIST 学生数人とルワンダ・プロジェクトメンバーでいくつかのグループにわかれ、大学を見学するなどしてキガリ市内をまわった。

9/9(土)

ブタレにて UWSA の Claire 氏と Esperance 氏とミーティング。交流会についての細かい打ち合わせを行った。

9/11(月)~12(火)

11 日はルワンダ国立大学において歓迎のダンスや双方の挨拶のあと、日本側とルワンダ側それぞれの歴史についてプレゼンテーション。その後、それぞれの歴史を踏まえて、今の若者に何が出来るかという議題についていくつかのグループに分かれてディスカッションをした。

12 日は前日、時間がなくなり途中で切り上げてしまったため前日のディスカッションの続きをし、最後にそれぞれのグループで話し合ったことを発表。その後、ルワンダ国立大学生達に博物館と大学を案内してもらいながら見学。

#### ●良かった点

- ・現地での人脈が広範囲に広がったこと。
- ・交流をしながら色々な話をして、影響を受けたり考えさせられたりすることがあった。
- ・ディスカッションを通して意見交換が出来た。
- ・同年代の友達として連絡をとるようになったことで継続した関係が築けた。
- ・ルワンダではエリート層である大学生を知ったことで、他の現地人との比較が出来たこと。

#### ●反省点

- ・打ち合わせ不足により、直前まで相手側との意見が噛み合わなかったり、時間がずれこんだりして予定していたことが出来なかったこと。
- ・プロジェクト内で目的が共有出来てなかったこと。目的が全体で共有出来ているか確認しながら話を進めていくべきだった。

#### ⑤ 少年兵社会復帰支援施設での活動

##### ●班で設定した目的・目標

元子ども兵士と我々との共同作業を通して、子ども兵士への理解を深める。共同作業を通して元子ども兵士と地域の住民とが時間を共有できる場を設け、地域の住民に子ども兵士に対する理解を深めてもらう。

## ●活動内容

9/18(月)

ムハジにあるルワンダ政府が運営する少年兵社会復帰支援施設のを訪問し、説明を受ける。その後交流の一環として、互いに歌やダンスを披露。KISTの大学生やJICA関係者（協力隊員、専門調査員）の協力の下、5人の元子ども兵士にインタビュー。インタビュー担当者以外のメンバーと子どもたちは、バレーボールをして交流を深めた。

## ●良かった点

- ・当日は短時間ではあったが、ソーラン節を契機に子どもたちとの距離が少し近づいた気がした。ある程度レベルの高い出し物を真剣に披露することは、交流にとっても有効だった。踊りやスポーツを通して一緒に盛り上がるのが出来たのは、思いがけず大きな収穫だった。
- ・今回双方の印象が良かったので、今後も連絡を取り合って関係を進展させることは大いに可能だ。子ども兵士に対する我々の理解を深めるためにも、子どもたちと交流を続けて三次活動につなげることは有効だと感じた。

## ●反省点、発見

- ・密に連絡を取り合うことができず、こちらの企画と目的を十分に伝えることができなかった。
- ・施設のスケジュールやプログラムを把握できていなかったのも、時間がないと言う相手の理由で、半日の施設見学+インタビューという一次活動からあまり進展の無いプログラムになってしまった。ルワンダの国事情も考慮して、もっと早い時期から連絡を取り合い、双方の理解を深め、活動内容や目的の共有、日程調整をするべきだった。
- ・エマニュエルさんは休暇中にも関わらず、かけつけてくれたようだ。直前に日程変更の申し出があり、当日は時間に余裕があったのか、実際に訪問してみるととても温かく迎えてくれ、施設のことも熱心に説明してくれた。インタビュー中のスポーツも施設側が提案したことで、事前の連絡次第ではもっと有意義な活動ができたと感じた。
- ・天候の関係でインタビューにも十分な時間がとれなかった。子ども兵士として、想像を絶するような悲惨な経験をしている子どももおり、心理的に負担をかけかねない内容なので、短時間で素直な答えを要求するのは難しい。インタビュー前にもう少し時間をかけて、個人的にある程度打ち解けた状態で話が聞ければベスト。

## ●現地側から聞いた今後のニーズや期待

スポーツ大会をやりたいという要望を頂いた。近くに大きな球場があるので、そこで社会復帰した元子ども兵士や地域住民なども交えて交流の場を設けることができれば、新しい取り組みにつながれると思う。

## ⑥ 国連ルワンダ国際刑事法廷（ICTR）への図書寄贈活動

### ●班で設定した目的・目標

2006年3月の第一次現地活動で、メンバーが国連ルワンダ国際刑事法廷（ICTR）情報センターを訪問した際、同センターのチャールズ・カムル氏から、「ICTR情報センターの蔵書を拡充したいので、早稲田大学からセンターに図書を寄贈してほしい」との依頼を受けた。ルワンダでは現地語の他、フランス語と英語が公用語であり、フランス語か英語で書かれた、国際法、人権法、戦争犯罪、政治学、平和構築などの諸分野の図書を希望された。

発展途上国と呼ばれる国々の多くで本というものは貴重品である。そして、国の将来の発展を担うべき若き学徒ですらも、最新の知識にアクセスする機会は乏しい状況にある。ICTRの情報センターはルワンダ国民に開放されており、裁判関係の資料や、国際法、国際政治学、平和学、紛争解決学などの図書を閲覧できる。またインターネットも自由に使用でき、多くの学生・市民が利用している。



第一に同センターの蔵書を充実させることによる学びの機会の拡大を図ること、第二に大学としての国際貢献の可能性の一つの形として成り立つかを見極めることを目的として、企画した。

●活動内容

2006年6月、小峯とプロジェクト・メンバーの学生が、早稲田大学中央図書館を訪問し、中古圖書の寄贈が可能かを確認した。結果としては可能であるとの了承を得た。

続いて、ICTR情報センターと必要な図書について連絡調整を行った。調整方法は、中央図書館のリストをメールで送り、その中から必要な図書を選択してもらい、それを中央図書館に連絡した。中央図書館の職員が必要な図書を抜き出す作業を行い、図書館にて引渡しを行った。

2006年9月、第二次現地活動に参加する17名で手分けをして、94冊の図書を現地に移送した。ICTR情報センターのイノセント・カマンジ所長をはじめ、同センターで働く国連スタッフらによる贈呈セレモニーが開催された。

●良かった点

- ・ 知の源泉である大学としての国際貢献の一例を示すことができた。
- ・ 図書寄贈がかなり感謝されることがわかった。
- ・ 国連スタッフとの交流の場を持つことができた。

●反省点

かなり重いことから、飛行機の重量オーバーを気にせざるをえなかった。

●現地側から聞いた今後のニーズや期待

図書寄贈に関しては特になし。イノセント・カマンジ所長からは、これからも日本の若い人たちにルワンダに来て、ルワンダの虐殺の歴史や平和再建の様子について知ってほしい旨の言葉をいただいた。

⑦ ストリートチルドレン活動

●班で設定した目的・目標

- ・ ストリートチルドレンの現状を知るための活動をする。
- ・ そして自分達に何ができるかを考える。

●活動内容

1. フィデスコ・ルワンダ訪問4回 (9月4日・11日・13日・15日)

9/4(月)	挨拶・施設見学・打ち合わせ 現地でフィデスコ・ルワンダの加藤隊員に電話にてアポを取り、メンバー全員で訪問する。職員の方々に挨拶をし、加藤さんから施設の簡単な説明を受け(フィデスコ・ファウンデーションについて、フィデスコ・ルワンダの活動について、施設のスケジュールについてなど)、11日以降の活動内容の打ち合わせをする。
9/11(月)	施設見学・職員の話・子供インタビュー センター長フェストゥス氏より、施設概要、活動内容、政府・警察とNGOのストリートチルドレンに対する立場の違いなどの説明。施設にいる2人の子供にインタビュー。
9/13(水)	ミサ参加・施設見学・職員の話・子供インタビュー 家族探し担当ジャン・バティスタ氏より説明。美術工芸品製作指導担当のクリストフ氏より説明。説明ストリートチルドレンのリクルーターのテオジェン氏より説明。施設内の牛の角民芸品工場を見学。4人の子供にインタビュー。
9/15(金)	職員の話・施設見学・今後の活動についての話し合い 学校担当アテノジェン氏より説明。施設内の牛の角民芸品工場を見学。フェストゥス氏、テオジェン氏と今後の活動について相談。プロモーション用映像の撮影。

2. ストリートチルドレンインタビュー4回 (9月8日・9日・10日・13日)

※インタビューの流れ

インタビューの対象者についてエリックにこちらの希望を伝え、ストリートチルドレンがいる場所に案内してもらう。インタビューの所要時間は1人につき約1時間半。最後にお礼のお金を渡して帰る。

9/8	キガリ 問屋街 (16歳男)
9/9	キガリ ニャブゴゴの市場 (14歳男)
9/10	キガリ ラジオフラッシュ付近 (5歳男)
9/13	St.Paulにストリートチルドレンを招いて (18歳男)

●反省点・良かった点・発見・気づき

一番の反省点は、滞在中に班のミーティングがなく、インタビュー内容の見直しや情報の共有ができなかったことだ。その他、お礼のお金を渡す際、大勢の人に囲まれているとトラブルになりやすいため、タイミングや方法、金額を慎重に考えなければいけない。当初はインタビュー対象者のストリートチルドレンとは継続的な関係を築いていくことを目的としていたが、彼らは行動範囲が思ったより広いため、継続的にコンタクトをとることが難しいのではないかとと思われる。4回のインタビューを通して様々な生活パターンを知ることができたが、もっと時間があれば、仲良くなった子どもを通して、もっと深いインタビューをしたかった。

自由に動ける立場を活かして、施設側に情報を提供したり活動を提案したりすることも、今後の活動として可能ではないか。

ストリートでのインタビュー中に、通りすがりの学生が話しかけてきて、私たちの活動を見てストリートチルドレンについての興味を喚起されたと言ってきた。国立大学の大学生と話したときに関心の低さを目の当たりにしたが、そのような人たちに興味を持ってもらうような活動もできるのではないか。

(3) 映画「ホテル・ルワンダ」上映会 (2006年11月3日)

・ 企画趣旨

映画を通じ、ルワンダの虐殺と内戦の歴史について関心を喚起する。

・ 会場

早稲田大学小野梓記念講堂

(4) 写真展「Rwanda Days」(2006年12月)

・ 企画趣旨

第2次現地活動の写真と活動報告をパネル展示する企画

・ 会場

早稲田大学国際コミュニティセンター (ICC)

(5) 第三次現地活動 (2007年2月7日～21日) ※参加メンバー5名

2月8日 (木)	○孤児院ギシンバ・メモリアル・センターにて交流会の打ち合わせ (到着後) ・11日に行う交流会のタイムスケジュールの決定
2月9日 (金)	○ ストリートチルドレン支援施設フィデスコを訪問 (午前) ・子供たちの作業見学と、職員さんとの質疑応答 ○ キミサガラ青年の家を訪問 (午後) ・二次メンバーのCD-Rを届け、学校紹介

2月10日(土)	○ ブタレ訪問(終日) ・ルワンダの伝統的なダンスの鑑賞と、盆踊りによる交流
2月11日(日)	○ ギシンバ・メモリアル・センターで交流会(午後) ・歌と踊り、絵などによる交流
2月12日(月)	○ 虐殺ミュージアム見学(午前) ○ 市内散策(午後)
2月13日(火)	○ ムニャカジさんの実家訪問(終日) ・地方の暮らしを見せていただく
2月14日(水)	○ カヨンザでバレーボールコート作り(午前) ○ 自由時間(午後)
2月15日(木)	○ FIDESCO 訪問(午前) ・ストチルへの声掛けの様子を見せていただく ○ REACH 訪問(午後) ・REACH の活動について伺う ○ KIST と打ち合わせ
2月16日(金)	○ 虐殺メモリアル訪問(午前) ○ KIST 訪問(午後)
2月17日(土)	○ カヨンザ訪問 ・交流会とバレーボール大会
2月18日(日)	○ ニャガタレ郡カランガジの JOCV 綿本隊員訪問 ・綿本さん自身の活動や、ルワンダ人でルワンダ女性のための活動を見学
2月19日(月)	○ 市内散策

### ① ストリートチルドレン活動

ストリートチルドレン支援施設 FIDESCO (フィデスコ) を訪問。

#### ●目的

第2次現地活動までの活動協力に対するお礼。第1次、2次メンバー佐藤愛沙さんを中心とする日本で行った募金の引渡し。ストリートチルドレンの施設の見学。

**9日** 施設訪問。職員から施設内を案内してもらい、説明を受ける。

日本にいる間に、青年海外協力隊員の加藤隊員と連絡を取りあっていたので、現地ではたつことなくスムーズに訪問ができた。まず FIDESCO の活動内容について、加藤隊員の通訳を入れながら、担当している仕事ごとに職員さんそれぞれにキニヤルワンダ語で話してもらった。FIDESCO は近くのキリスト教会と協力して活動をしているので、職員さんには修道女の方もいる。活動内容の説明は、職員さんそれぞれの担当ごとに紹介していく。

#### －FIDESCO の精神☆

道端にいる子供たちをドラッグや盗みなどの悪い文化から遠ざけ、社会の下の状況をみるのではなく、上の層を見せる。汚い格好をして、人々に遠ざけられているような孤独な子を見つけ、受け入れ、守り、社会の一人間として人生を全うさせるために社会に戻る。キリスト教のいう、人間を形成する「体」と「魂」のうち、「魂」を、神の言葉を知ることによって救う。

#### －施設見学

施設内にある、牛の角の加工工場で実際に訓練をしている子供たちの様子を見せてもらう。

6ヶ月間の研修を行うことで、自立して仕事を始めたり、加工工場で働けるように活動してい

る。ひとり一日 20 ピースを作るように目標を与えている。のこぎりで切ったものを専用の研磨の機械を使ってピカピカの商品に仕上げている。

施設内で牛の角製品の腕輪や栓抜き、ペンダント、バナナリーフカードを販売しておりメンバーで購入。

**15日** ストリートチルドレン調査に同行。

FIDESCO はユニセフからの資金援助を受けているが、その援助は安定した継続的なものではないため、テオジェンさんたちがストリートチルドレンの調査に街へ出かける交通費も不足している。今回はプロジェクトでチャーターしている車両で5箇所を回って調査を行う。各箇所によってストリートチルドレンの性格があり、マーケットや炭売り場にいる子たちはまじめに働き、お金を稼いでいるようだ。途中で小学生くらいの子たちが、ボンドからシンナーを吸っているのを発見し、テオジェンさんが取り上げるとともに、シンナーが体に非常に有害であるのでやめるように子供たちに説得していた。道端で子供達がシンナーを吸っていても、周りの大人は何も気にせずほったらかしで、テオジェンさんたちが指導していると周りの大人が寄ってきて、注意をしたりしていた。

## ② 孤児院ギシンバ・メモリアル・センターでの交流活動

第二次現地活動でも行った、同センターでの活動。

### ●活動経過

**2月9日** センターにて交流会の日程の打ち合わせ。

日本で収集した通学かばん、古着、子供靴の受け渡し。施設内見学

**2月11日** 交流会当日。

自己紹介、歌披露、炭坑節披露、空手披露、お絵かき、記念撮影

### ●反省点

- ・説明をしてもらっている際にメンバー全員が聞いていないことがあった。
- ・準備不足（当日、絵を描いてもらう紙、ペンがないなど）
- ・メンバー間の意思疎通ができていなかった。
- ・交流の際にうまく全体の統制がとれず、孤児院スタッフに迷惑をかけてしまった。

### ●よかった点

- ・ニーズを聞いていったので、かばんなどを渡して喜んでもらえた。
- ・人数が少なかったこともあり名前を覚えてもらえた。
- ・現地の歌を覚えていったのでみんなで歌を歌えた。
- ・「大きな栗の木の下で」は二次でも歌った歌だったので覚えてくれている子が多かった。
- ・子供たちが楽しんでくれた。
- ・日本の子供たちの絵に興味を示してくれた。

## ③ 大学生交流活動

第二次現地活動に次ぎ、ルワンダ国立大学の学生グループとの交流活動を行なうこととした。今回は、ルワンダ国立大学の学生文化組織「INDANGAMUCHO」が主催し、同大学講堂で行われた文化交流行事への参加を行った。

### ●活動経過

**2月10日～11日**

ブタレ到着。「INDANGAMUCHO」の学生リーダーと合流し、大学構内へ移動。

文化交流行事は夜8時半頃から行われ、学生をはじめ、地元の人々も来訪していた。

最初に、ルワンダの伝統的なダンスをしているグループ「INDANGAMUCHO」が、伝統的な衣装を身にまとい、踊りを披露してくれた。踊りには、男性だけで踊る踊り、女性だけで踊る踊り、男性と女性が一緒に踊る踊り、の三種類があるようである。これらのダンスグループは、ジェノサイドが起こった後、もう一度伝統に目を向け、両民族の友好を深める目的で結成されたものである。

つづいて、メンバーの一人が同大学の空手部員とともに空手演舞を披露し、観客から大きな歓声を得た。

そしてその後に、他のメンバーも壇上に上がり、日本の伝統的な踊りということで炭坑節を披露した。途中からルワンダのダンスグループの人も一緒に輪になって踊ってくれ、日本人もルワンダ人もとても楽しそうで、そのことがとても印象的であり、嬉しかった。

その後も、平和を願う自作のラップを披露する人など、様々なパフォーマーの人が登場し、12時近くまでそのイベントは続いた。

#### ●反省点

当初、学生と AIDS についてのディベートを行う予定であったが、時間の都合上中止することになった。しかし学生に聞いてみたところ、ルワンダの人々の間でも AIDS に対する関心は高いようであり、街でもたくさんの AIDS に関する看板を見かけた。

#### ●良かった点

現地の学生がとても協力的であったことが、本当に嬉しかった。私たちが炭坑節を踊るに際し、曲の準備や、手順の確認など、様々な面で、私の拙い英語を懸命に理解しようとしてくれたり、また、ルワンダの人の発表の時には、この踊りはこうだよ、とか、これはこういう意味なんだ、など、わかりやすいように説明をしてくれたりして、すごく助けられ、それによって、より一層この行事を楽しむことが出来た。

また、敷地内に建てられた碑は、現在ののどかな雰囲気からは想像もつかないもので、しかし実際にその場所でジェノサイドは起こったのだと考えると、本当になんとも言えない気持ちになった。しかし、ルワンダの人々自身が、ダンスなどの活動を通して、両民族が友好的に共存していけるような社会を築いていこうとしていると言うことは、とても重要で意味のあることだと考える。

#### ④ 視察報告：旧ギティ区（現・北部州ルワミコ郡） 日時：2月13日（火）

キガリ市街地から北東へ向かった。地方の村落の様子を知るためだ。案内人はアデオダトゥス・ムニャカジ氏。駐日ルワンダ大使館で3年間職員のハウスキーパーとして勤務した経験があり、今でも日本語が話せる。ムニャカジ氏の出身はギティという湖畔の農村地区で、彼の母はそこで生活している。

舗装されていない坂道を登った所にお母さんの家はある。飾り気は無いが手入れの行き届いた庭に、リビングに小さな部屋が付いた質素な家と、農具小屋、納屋がいくつか。リビングの家具は、テーブルクロスをかけ花を飾った机とソファだけしか置いていない。キリスト画やマリア像、和風のカレンダーが一定の間隔で並べられている。お母さんの性格がうかがえる。電気は通っておらず、炭を入れるタイプのアイロンがあった。

彼の母とその近所の家では豆、バナナを栽培しており、そのバナナを発酵させたルワンダ特有の濁酒・ウルグアグアに加工している。また、牛6、7頭、鶏多数の飼育もしており、家は賑やかだ。中庭では近所の人たちとお母さんが豆の選別などをしていた。広い土地をお母さん一人では耕作しきれないので、人を雇うこともあるとのこと。

敷地の様子やウルグアグアを作っている現場を見せてもらい、出来立てのウルグアグアを頂

いた。甘酸っぱくて温かいお酒を木製ストローで吸い上げる。グラスで飲むよりも、ストローで飲む方が香ばしく美味しい気がした。結婚式ではウルグアグアを注いだ瓢箪に2本のストローを挿し、新郎新婦が飲むそうだ。

農家の生活に馴染みの無い私たちにとってはあらゆるものが珍しく、興味深かった。一つ一つのことに驚き興奮し騒いで、お昼過ぎにおいとました。玄関の段には、94年4月の文字。後述するが、この家庭にもジェノサイドの悲劇はふりかかっていた。

昼食のレストランに行くために車に戻ろうとすると、子どもたちが集まっていた。こんな所まで車が来るのが珍しいのだろう。子どもたちは最初見慣れない東洋人に戸惑っていたようだったが、はにかんだ笑顔を見せてくれた。ここの子どもたちはキガリの子どもたちよりも家事労働をしているように見えた。車内から、農作業や水汲み、弟妹の世話をしている子どもたちを沢山見かけたからだ。実際に、次々と差し出される小さい手は骨ばっていて、手足だけでなく体中泥だらけだった。服も泥と穴が目立ち、体つきは華奢で肌は日に焼けていた。それ程都市から離れていない地域でも、こんなにも生活に差があるものなのかと思った。

昼食は湖のほとりのレストラン。細長い形をした湖は、まるで大きな川のように。湖から吹く風は冷たい。その風に揺られる魚釣りのボート。驚の群れが船着場に集う。取れたてのティラピアはとても美味しかった。

レストランでムニャカジ氏が日本にいた頃の話聞いた。日本のテレホンカードや定期券、銀行のキャッシュカードを、彼は今も財布に入れていた。財布の内ポケットには旧タイプのプリクラが1枚貼られていた。彼はしきりに「ルワンダはだめだ」という。理由は「貧乏」。日本で彼の月収は30~35万円だった。失業中の彼の家庭の収入源は奥さんの稼いでくる1万円程。3人の娘を養うのは厳しい。彼が日本で働いていた時の大使も失業し、更には経済的理由で離婚したそうだ。

彼以外にも、ルワンダ人には祖国のことを「貧しいからだめだ」と言う人が多い。暑い中スーツや革ジャンに身を包み、高級デパートで輸入品を買い込む人もいるがそれはごく少数で、大抵の人は将来が不安定で未来に怯えている。ルワンダには心優しい人が多くて自然がきれいな良い場所なのに、とってしまうのは、私たちが強者としてルワンダに足を踏み入れたからなのかも知れない。そこに生きている人たちにとっては、自然や優しさなんてどうでもよい。生きていくこと自体が問題なのだ。

でこぼこ道に揺られ帰る途中にアンチ・ジェノサイドの看板が見えた。この地区は94年当時の市長が警察と協力し、ジェノサイドが起きなかった「聖地」と言われている。早期にこの地区に逃げ込んだ人々も助かった。

ただ、確かにフツ族によるツチ族の虐殺は無かった。しかし逆は起きていた。ムニャカジ氏一家もその被害者だ。ムニャカジ氏はお父さんがフツ族、お母さんがツチ族のハーフだ。RPFはここに侵攻すると、何もしていないお父さんを連れ去り殺害した。その後の子沢山の母の苦勞がどれ程であったかは想像以上のものだろう。お母さんの顔に刻まれた深いしわや硬い手がそれを物語っている。

照れ笑いしながら結婚式の写真を見せてくれたお母さん。愛情に満ちた彼女の目から、今もお父さんを大切に想っているのが分かる。

キガリへの復路でガチャチャをしているのが見えた。本来ならば地域住民は参加しなければならないのだが、ムニャカジ氏は「怖くて行けない」と言う。

#### ⑤ 視察報告：ニャガタレ郡カランガジ 2月18日

キガリから車で2時間以上かかる地域で、ウガンダ国境に近い北東部カランガジに、ルワン

ダ・プロジェクトのメンバーで2006年10月から海外青年協力隊村落開発普及員として派遣された綿本結子が活動をしている。カランガジは、98年にウガンダから帰国した亡命者によってできた新しい村だ。それまでは国立公園だった場所で、サバンナ風のなだらかで乾いた大地が広がっている。所々に生える樹木や草は他の地域のそれと大きく異なり、乾燥に強い丈が低いものや多肉植物だ。どこまでも続く拓けた大地は、いわゆる「アフリカらしい」景色だった。

最初に訪れた教会では丁度、きれいな布を身にまとった5人の女性が歌を歌っていた。賛美歌をアフリカ風にアレンジしたものだろうか。パーカッションの裏打ちと聴衆の手拍子が入り、一体感が出ている。歌が終わると、2人の女性が「神に祈りを捧げていたら病気の娘が治った」と話し、神への感謝を述べる。歴史が浅く住民同士の横の繋がりが希薄なこの地域では、教会が近所付き合いを生むパイプとなっている。

次に訪問したのはNGO ママン・スポルティヴ。創立者ガランベ・シルベさんはウガンダで学んだミシンを教え自立を支援する。現在生徒は16~32歳の男女20人。最初の1ヶ月は理論を学習し、11ヶ月の実習をする。卒業後の進路は様々で、ミシン技術を活かし工場に就職する人が多く、資金があれば起業も望める。

ただ、問題はミシンの台数。現在7台しかない。多い年度では40人以上の生徒を抱えることもあるが、肝心のミシンが不足している。ミシンは1台6万フラン。キガリの肉体労働者の賃金が1日1千フランであるから、とても高額である。この団体は朝夕の二部制をとることによりミシン不足を補い、月120着を作っている。

昼食は小さな食堂で取った。5、6名の先客がいたが、我々8名が来ると満員になった。メニューはいつもと同じ。マッシュバナナ、ウガリ、ピラフ、豆、チップス、スパゲッティの中から主食を選び、おかずは牛の煮込み。飲み物もいつも通りコーラ、スプライト、ファンタ。ルワンダ人は食文化に保守的だと聞いていたが、キガリとは違う環境の中でも同じものを食べていることに驚いた。

保守的なのは食だけでなく生活全般に共通しているように思う。例えば耕作。この地区は土地が痩せているのだが、毎年同じ場所に同じ穀物を植える。また、沢山いる牛を使えば有効に農地を耕し、耕作面積を拡大することもできるのにそうしようとしな。仮に目の前に、穀物を交代で育てる、あるいは牛耕で成功した人がいたとしても、ほとんどの人が真似しようとしなそう。伝統を大切にする文化が根付いているのだろう。伝統舞踊を踊れる人も多かった。

伝統の力が良い方向に働いている時は構わないが、必ずしもそうとはいかない。私はゴミ問題も伝統に起因しているのではないかと思った。バナナの皮や食べ物を包んだバナナの葉、素焼きの陶器は路上に捨てても自然に戻る。そうして生活してきた民族は世界に複数いる。しかし同じように食べ物を包んでいるビニール袋や瓶のふたは自然に戻らない。食べ物を包んでいたものを道端に捨てる習慣があった地域の人々は、何故路上に人工物を捨ててはいけなのか理解しづらいうだ。このままではいつかルワンダが「ゴミの丘の国」になってしまいそうで恐ろしい。

最後に訪れたのは、インターナショナル・ヒーリング・メニストリー (IHM)。昨年8月にファティアさんが立ち上げた。家庭や経済上の理由、エイズ等で学校からドロップアウトした子どもや女性に手芸品、編み物を教えている。ここのミシン4台はママン・スポルティヴから寄付されたものだ。編み物の機械は2台。現在の編み物の教師は2人、生徒は6人。ここでもまずは理論の勉強、その後糸節約のため子ども服から作り始める。衣料の生産をウガンダに頼っているルワンダだが、国産の衣料を普及させることができるかも知れない。既にオーダーは700近くあるので、生徒を増やしていきたいとファティアさんは語ってくれた。

実はファティアさん自身、経済的理由で学校に行けなかつた女性の一人だ。「自分のような女

性の手助けをしたい」という一心でウガンダで手芸を学び、2004年にこの団体の構想を作った。それから2年間練り上げて、遂に彼女の夢は起動し始めた。経済状況が厳しいと人は目先の利益を得ることに必死になりがちだが、それではいけない、7年先を考えて行動しなければとファティアさんは言う。そして100年先に実が成ればいい、と。

人間の心を強くするのは断食だという教えを信じ、IHMの成功を願掛けしているファティアさんはか細かったが、瞳の輝きときびきびした言葉から芯の強さと優しさが溢れていた。彼女のような人がいれば、そして彼女に賛同し彼女を支援する人々が増えれば、ルワンダの未来は決して暗くはないと心から思った。

### 3. 事業の成果と展望：学生ボランティアの比較優位性への気づき—中立性とつなぎ力

プロジェクト参加者は手探りながら、「自分たちにどのようなことができるか」という命題に取り組んできた。そして学生ボランティアだからこそ果たせる役割として、「中立性」と「つなぎ力」というものがあるのではないかという気づきに到達した。

この気づきのヒントになったのが、第1次現地活動時に除隊兵士の職業訓練校を訪問した時のことの出来事であった。94年の虐殺後に成立したルワンダ政府は、虐殺を鎮圧した反政府勢力ルワンダ愛国戦線(RPF)によるものである。RPF中心の新政府によって新たに作られた国軍は、旧政府軍や民兵を吸収した後、除隊を進めていくことになった。そのような除隊兵士の社会復帰のための職業訓練が、国際社会の支援を受けながら行われている。我々が訪れた職業訓練校は、国際協力機構(JICA)の支援によって運営されており、JICA職員の案内で訪問することとなった。家族と離れて職業訓練に励む除隊兵士は、学生たちを見ると、歓迎の表情で迎えてくれた。ある者は妻を、ある者は自分の子どもを思い出し、懐かしむようでもあった。一緒に写真を撮ったり、アドレスを交換するなど和気あいあいとした雰囲気にも包まれていた。そんな彼らがJICA職員に対しては時折、険しい顔で訓練校での生活への不平や、「〇〇が必要だからお金を出してほしい」というような要求を口々に突きつけるのであった。両者にあるのは援助を「する側」と「される側」の利害関係であった。筆者も同様の経験がある。NGOスタッフとして現場に行くと、現地の人々は「NGOは援助してくれるもの」という意識があり、すると利害を超えた信頼関係を築きづらくなるのである。ここでの出来事で、「カネがない」ゆえに逆に「経済的利害関係から中立でいられる大学生」という存在意義への気づきの端緒が見えたのである。

この「中立性」というものは、政治的緊張が高く(いわゆる政治権力闘争の次元だけでなく、政治を批判した個人への脅迫や逮捕なども意味する)、経済的な格差が広い紛争後の社会において意味のあることである。そして日本人であることの「もの珍しさ」があることも含め、「日本の大学生」であるということ、一国の大使から、大学教授・大学生などエリート層、地元の青年、国際機関職員、NGO、宗教者、ストリートチルドレン、孤児、元・児童兵士、路上生活者、ラジオ会社社長……というように、多様な立場の人たちが交流を求めたり、歓迎してくれたり、また比較的警戒心を持たれずに接してくれるということが分かった。そしてこの幅広い層の人たちと交わることができる立場の優位性が、もう一つの「つなぎ力」への気づきを導き出すこととなったのである。

ルワンダ・プロジェクトは、ルワンダ政府が運営する児童兵士社会復帰施設を訪問した。この施設にいる元児童兵士は、虐殺を起し、のちにRPFによって西のコンゴ民主共和国に逃れた旧政府側の武装勢力によって徴兵された子どもたちである。したがって現政権に敵対する側にいたのだが、投降や脱走によって現政府側に保護され、この施設に移送されたのである。



この施設を訪問した時のマタトゥ（トヨタハイエースを改造したバス）の車掌をしていた青年エリックは、幼少時に虐殺で両親を目の前で殺され、後に RPF に志願し、現政府軍の兵士として軍務についていたことがあった。いわばこの青年と施設にいる元児童兵士は、「敵方」にいたこととなる。プロジェクト参加者たちが施設の説明を職員から受けている間、エリックは元児童兵士と談話していた。宿舎への帰路、車上でエリックが興奮しながら言った。「ミスター・コミネ、今日はとても偉大な日だった。僕は今日、昔の敵と語り合った。昔は敵だったのだけれども、今では僕たちは一つだということを確かめられたんだ」。

またプロジェクト参加者たちがストリートチルドレンや路上生活者への聞き取り調査を行った際、現地で交流した大学生に通訳として協力してもらっていた。一通り調査を終えた時、協力してくれた現地学生が、参加者たちの活動を見てストリートチルドレンについての興味を喚起されたと言った。期せずして、将来のルワンダを担うエリート（大学生）が、社会の底辺にいる人々の実体について知り、問題意識を持たせることとなったのである。

この2つのエピソードに見るように、異なる立場の人間をつなぐことで、何らかの変化を生み出せる可能性があることが分かる。この「つなぎ力」が紛争後の社会でなぜ重要なのか。現在のルワンダは様々な面で「分断社会」である。13年前の虐殺による加害者と被害者・遺族との分断、また経済的には富者と貧者の分断（経済格差）、エリートと貧民との間の分断、内戦当時の敵と味方との分断、都市と農村の分断などである。このように様々なレベルにおいて分断している各層と関係をもてる学生ボランティアは、分断している両者の関係を取り持ったり、社会問題への関心を喚起したりすることができる可能性を秘めていると考えられる。

ルワンダ・プロジェクトを通じ、大学生は、政治的な緊張が続き、経済的格差も大きい国で、中立性を保てる存在であり（これは日本がアフリカを植民地化していないという歴史的な中立性も大きくかかわっていると考える）、また「日本人の若者」という珍しい存在ゆえに目立ち、一国の大使から路上の困窮者まで誰とでも利害無く交わることができることで、様々な階層の人々をつなげることができる可能性を認識することとなったのである。

本プロジェクトは、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター主催プロジェクトとしては2007年3月末で終了したが、プロジェクトに参加した学生らによって、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター公認プロジェクトとして2007年6月に認定され、活動を継続している。プロジェクトは今後、ルワンダ問題啓発のための写真展、映像上映、International Healing Ministry へのニット編み機の寄贈、そのためのチャリティコンサートの企画などを行っていく。

以上